

太平洋戦争と北米伝道 ⑦ ハワイでの戦後復興

おやさと研究所講師
尾上 貴行 Takayuki Onoue

ハワイの教信者たちの戦時生活

太平洋戦争中、ハワイでは1,446名の日本人が逮捕され、その内「危険な敵性外国人」として757名がアメリカ本土の司法省抑留所に送られている(山倉 2011年、100頁)。天理教関係者の逮捕は、日本海軍による真珠湾攻撃の直後から始まった。本田兼記ノースホノルル教会長は当日の午前中に月次祭をつとめていたが、その終了後間もなく検挙された。外出時に連行された川崎みゆきアロハ教会長は「一寸来てくれ、という事で、そのまま連れていかれ、着の身着のままで五日間、風呂もいれてもらえませんでした。」(天理教ハワイ伝道庁 2006年 a、48頁)と述懐している。反面、FBIが来たものの、逮捕されずにいた教会長や布教師などもいた。アメリカ本土と異なり強制収容は限定的であったため、官憲の厳しい監視下の中ではあったものの、信者宅訪問などを続ける教会長や布教師もいた。ラナイ教会では「住宅と教会は別になっており、田舎のことで誰も見張っているわけではないので、お供えもしておつとめもつとめた。お参りに来る人もあった。戦争中とはいえかなり安気なものであった」(天理教ハワイ伝道庁 2006年 b、50頁)。

しかし、天理教の教会長が抑留されハワイに残された家族、また戦後帰還した教会長や布教師たちは日系移民社会で厳しい目にさらされることになった。逮捕された教会長たちは、宗教家として人々から尊敬される立場から一転して犯罪人扱いとなるなど、精神的なダメージと屈辱は計り知れないものであった。また残された家族も、官憲のみならず、周囲の同胞の冷たい視線の中で生活を送ることを余儀なくされた。本田兼記会長が逮捕された後、ヘレン夫人は働いていたデパートを解雇され、逮捕されるような人に家は貸せないと家主に言われ教会を立ち退かなければならなかった。

戦後の復興

戦争が終結すると、抑留されていた教会長や布教師たちは順次ハワイに帰還し、残されていた家族とともに教会復興に着手した。しかし、戦時中にキリスト教などの他宗教に改宗した信者もあり、その道のりは容易なものではなかった。また天理教は、戦時中日本と強いつながりを持つ教団としてアメリカ政府当局に危険視されていた。1946年3月21日付のハワイ現地新聞『アドバタイザー』では神道復興反対が論じられ、「官憲の話として、まだ解散されていないホノルルの二十八社(多くが天理教)を解散させて復活できないようにする対策が執られつつある」(前田 1999年、39頁)との報道がなされるなど、敗戦国日本の宗教として、ハワイ社会ではその復興に対する強い反発があった。戦前に隆盛を誇った神社界は、「国家神道」との結びつきを懸念され、社会批判への対応や組織の再編などに多くの時間が費やされた。天理教でも、戦後にハワイで最初に教会が新設されたのは1950年のカリヒ教会であり、1954年にはハワイ諸島の天理教統括機関としてハワイ伝道庁が設立されたが、各教会が復興し、諸活動が活発化するには10年近くの歳月がかかっている。

戦後の日系移民社会ではアメリカ社会への同化が進み、一世から二世への世代交代が行われたとされるが、宗教社会学者の高橋典史は、ハワイの日系移民社会における日系宗教の変容を論じる中で、ハワイでは広範な日本文化の「リバイバル」が起

り、日系宗教も日本との関係を持続するという「トランスナショナルな側面」もみられたと述べている(高橋 2014年、93頁)。戦後、天理教においても、各教会は現地社会への「同化」を目指し、二世への世代交代をはかる一方で、日本から新たな布教師が派遣されたり、伝道庁に天理文化センターが設置されるなど、戦前同様に日本との繋がりが保持され、日本文化を通じての社会貢献を促進する側面もみられた。

「復元」と北米伝道

戦争がもたらした天理教教団への変化の一つとして、神道の影響下を脱し、教祖が本来説いた教えを伝え、実践するという「復元」が掲げられ、この動きは北米の天理教にも重要な意味をもつこととなった。日米開戦前から教団本部は日本政府によって厳しく干渉されるようになり、その活動も制限されていった。アメリカ本土、ハワイの日系移民社会でも、そうした教団本部の方針に応じた活動が展開され、アメリカ政府当局は教派神道の一派として日本国家との関係性を疑い、最終的には開戦と同時に敵性外国人として多くの布教師が逮捕・抑留されたのである。

歴史学者の島田法子は戦中戦後のハワイにおける神社の歴史を考察する中で、「宗教としての普遍性」について次のように述べている。

神道が仏教と異なるもつとも重要な点は、仏教が普遍的な世界宗教としての教理を掲げ、英語による布教を展開し、儀式や組織面ではハワイ主流文化に文化適応していったのに対して、神道は日本の民族宗教から脱皮できずにいたことである。普遍化の努力があったとはいえ、それはごく一部分に限られた消極的なものであった。(島田 2004年、189頁)

つまり日系宗教は、敵国としての民族宗教という枠を超え、信教の自由を保障しているアメリカ社会に受け入れられる方向性を見出す必要があったといえる。天理教では、満州事変以降、日本政府が国家主義的な思想統制を進める中で、天理教教義の根幹をなす公刊の原典が回収されたが、戦後あらためて公刊され、教祖の元々の教えにそった信仰の実践を目指すようになった。1951年に中山正善2代真柱はハワイ、アメリカ本土の各教会を巡教し、この精神を諄々^{じゆんじゆん}と説いて回っている。終戦は天理教が神道の影響下を脱する機会となり、北米地域においては日系移民社会またアメリカ社会全般に新たに受け入れられる方法を模索する出発点となったとも言えるだろう。

【引用文献】

- 前田孝和『ハワイの神社史』大明堂、1999年。
島田法子『戦争と移民の社会史：ハワイ日系アメリカ人の太平洋戦争』現代史料出版、2004年。
高橋典史『移民、宗教、故国—近現代ハワイにおける日系宗教の経験』ハーベスト社、2014年。
天理教ハワイ伝道庁『天理教ハワイ伝道庁五十年史—伝道庁史篇』天理教ハワイ伝道庁、2006年 a。
天理教ハワイ伝道庁『天理教ハワイ伝道庁五十年史—管内教会史篇』天理教ハワイ伝道庁、2006年 b。
山倉明弘『市民的自由—アメリカ日系人戦時強制収容のリーガル・ヒストリー』彩流社、2011年。